

## 最前線

現場

東京都新宿区の国立国際医療センター戸山病院。毎週土曜日になると、小児科病棟に笑い声が響く。

病棟の一角の赤いじゅうたんに並べられた玩具を前に、腕の点滴針のことを忘れたかのようにしゃべりながら、病室でカードゲームや将棋に興じる男児。同病棟では約十七年間、ボランティア団体のメンバーが、病中の子どもたちと遊ぶ活動を続けている。

「今日は何をして遊ぶか」「オセロやうろか」。八月下旬の土曜日。特定非営利活動法人(NPO)法人「病気の子ども支援ネットワーク」のボランティア(東京・江東)の坂上和子理事長と、オレンジ色のエプロン姿のメンバーが病室を巡回し、

## 医療

病中の子どもと遊ぶ活動を続けるボランティア(東京都新宿区)の国立国際医療センター戸山病院



## 病棟で遊びのボランティア

入院中の幼児や小中学生、付き添いの親らに聞いて回った。

子どもたちは遊びたい盛り。週に一度の訪問を受けるたび、メンバーの姿を見たと目が輝く。つらい闘病生活の中で子どもらしさを取り戻せる貴重な時間だ。

この日集まったボランティアは約十五人。ほぼマンツーマンで子どもたちと遊

ぶ。バイオリンを弾きたいとせがまれたり、将棋の相手になったり……。乳幼児には音の出るおもちゃが人気だ。感染症を防ぐためのクリーンルームにも入り、カードゲームなどを楽しんでいた。

将棋好きという白血病の六歳の男児は、メンバーに「やり方知らないんだっただ教えてあげるよ」と得意

顔。付き添いの父親も「子どもが喜び、助かっている」と笑顔を見せる。

「遊びは成長発達を助ける」と坂上理事長。「子どもと親が笑顔になれば、医療スタッフにもゆとりが生まれる」との信念から、一九九一年の活動開始以来、無欠勤だ。病棟の塩川加緒理副師長も「この子はこんな笑顔をするんだ、と気づかされる。我々のできないことをやってくれる」と評価する。

こうした遊びの場は少ない。安全性への懸念から、医療機関が及び腰になるケースがあるからだ。坂上理事長は「理解してもらうことが必要。NPOとしても正しい情報を伝えていきたい」と意気込んでいる。